



TITLE:

歓迎の挨拶

AUTHOR(S):

里見, 進

---

CITATION:

里見, 進. 歓迎の挨拶. 京都大学附置研究所・センターシンポジウム: 京都からの提言-21世紀の日本を考える (第9回) 「社会と科学者」 2015, 9: 5-7

ISSUE DATE:

2015-01-21

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/194287>

RIGHT:

---

## 歓迎の挨拶

東北大学総長 里見 進



皆さん、おはようございます。

京都大学附置研究所・研究センターシンポジウム「京都からの提言 ― 21 世紀の日本を考える」の仙台での開催にあたりまして、一言歓迎のご挨拶を述べさせていただきます。

このシンポジウムは、京都大学に附置されている研究所やセンターが共同で開催するシンポジウムで、第 1 回目が東京で開かれ、その後各地での開催を経て、今回で 9 回目になると聞いております。

今回、この 3 月に東日本大震災の被災地である仙台でシンポジウムを開いていただくことは、大変意義深いものであると同時に、京都大学から「東北の災害のことを決して忘れていないぞ。」という力強いご支援をいただいたものと感謝申し上げます。

本当に早いもので、東日本大震災から 3 年が過ぎております。4 日前の 3 月 11 日には、各地で追悼の日が催されました。この仙台国際センターにおきましても、仙台市主催の追悼会が行われ、約 1000 名の方々が参加したと聞いております。

地震、津波、原子力の事故による歴史上例を見ないような災害により、多くの傷痕が残されました。この仙台の地におりますと、それを殆ど感じないほど順調に復興が進んでおりますが、被災地ではやっと瓦礫の処理に目途がついたというのが現状で、復興・復旧に関しては緒に就いたばかりといえると思います。

私の所属する東北大学も多くの建物や設備が損壊しました。また、本当に悲しいことに 3 名の学生を津波の犠牲で亡くしております。

非常に悲しい出来事が重なりましたが、学生や職員の士気は非常に高く、震災直後の 4 月には、我々はこの災害の真っ只中にあった歴史上唯一の総合大学として、東北の復旧・復興、ひいては日本の新生のための先導に立つということを決意して、東北大学災害復興新生研究機構を立ち上げ、8 つのプロジェクト、100 を超えるプランを進行中です。

その中には、災害科学を総合的に研究する災害科学国際研究所の創設や、ゲノム情報と医療情報を結び付けることによって近代的な医療をこの東北の地からスタートさせるという東北メディカル・メガバンク事業をはじめとして、災害に強い情報通信網の整備や新しい環境エネルギーの問題、さらには、東北の豊かな海を取り戻すマリンサイエンスなど、多くの広範にわたる研究が現在進行しております。

振り返ってみますと、この 3 年間悲しいことばかりではなかったように思います。昨年、プロ野球の東北楽天は日本一に輝きました。また、今年になって、ソチオリンピックで羽生選手が金メダルを取ってくださいました。これらのことは東北の地を非常に力づけてく

れました。

来年の今ごろは、大学の知と教育の力によって東北の復興がさらに進み、日本が新生を迎えているといわれるように頑張っていきたいと考えています。

ただ、これは私たちの大学だけでできることではなく、世界のあらゆる研究機関や大学等の共同作業になると思っています。

京都大学が、研究の自由を基盤にした高い倫理性を備えた研究活動により、世界的に卓越した知の創造を行ってきた総合大学であることは、誰もがご承知のことと思います。

基礎研究と応用研究、文系と理系の研究の多様な発展と統合を図ることを研究面の理念として掲げられ、最近では、山中伸弥先生のノーベル生理学・医学賞受賞に象徴されるように、幾多の素晴らしい研究成果を挙げ、同時に有為な人材を数多く輩出しております。

この公開シンポジウムは、京都大学の各研究所やセンターの活動が生み出している研究成果を広く一般社会に対して分かりやすく説明することで、研究教育活動や社会貢献活動への理解や支援、協力を得ることを目的としていると聞いております。

今回は、「社会と科学者」をテーマにしております。世の中は、情報化やグローバル化が一段と進み、ナノテクノロジー、バイオテクノロジー、IT技術、クリーンエネルギー、地球環境問題など、まさにサイエンスの研究成果が人々の暮らしと密接な関係を持つようになっております。

また、教育や経済、福祉、情報、国際関係など社会科学の研究成果が社会に大きなインパクトを与えてきております。

サイエンスや社会科学の発展は、確かに人類の発展を成すものですが、同時に、放置しておきますと、大きな災禍をもたらす可能性がないわけではありません。したがって、今日の社会における研究者と市民の関係は、従来の研究者が送り手で社会が受け手という関係から、双方向性のコミュニケーションが求められる時代になったといえます。

その意味では、大学には社会に対して、研究や教育の成果を分かりやすい言葉で発信し、理解を得るとともに批判にも応える謙虚な姿勢が求められていると言えます。

日本の国立大学は、国立大学法人となって10年を迎えました。この間、各大学は社会貢献を一層重視して、公開講座やセミナーやシンポジウムなど、さまざまな形で研究成果の還元を行い、また、大学施設の開放、資源の有効活用などに取り組んできたと思っております。

本日の公開シンポジウムも、京都大学が最も力を入れている社会貢献、情報発信の一環として、京都から離れた仙台の地で、これほど多くの方々を集めることができたということは、京都大学が、これまでの歴史と伝統に基づき、さまざまな実績を上げてきたことの証しであると深く敬意を表しております。

本日のシンポジウムには、高校生や、その先生方がたくさん参加していると聞いております。高校生の皆さんに言いたいと思います。皆さんが、京都大学を代表する研究者の研

究に肌で触れることで、科学を好きになるという気持ちを深めてくれることを期待しています。そして近い将来、京都大学に入学してくださいと言いたいところですが、東北大学も立派な大学です。ぜひ京都や東北など、大学という場に身を置いて有為の人材になるように努力していただきたいと思います。

今日の社会は、大きな災難がいくつも続きましたし、国際関係も複雑になり、大変生きにくい困難な時代といわれておりますが、歴史を紐解いてみると、いつの時代にも困難はありました。そして、その困難を克服するのはいつも若い力です。学問や教育には問題を解決する力があります。ぜひ、皆さんは夢と希望と野心を持って大学という場に出てください。我々は、皆さんが国際社会で力強く活躍できる人材へと成長していくように、さまざまな場を使って一生懸命サポートしたいと思っております。

最後になりますが、このシンポジウムを仙台で開催いただくにあたりご尽力いただきました京都大学の松本総長をはじめとする関係者の皆さま方に敬意を表したいと思います。

京都大学を代表する河合先生、山子先生、森井先生そして山中先生の4名の先生方の研究に触れられる希有の機会であると同時に、本学からも災害科学国際研究所長の平川先生が参加いたします。

各先生方の提言を、参加者の皆様方は、各々の視点でとらえ、堪能され、思い出に残るシンポジウムになることを祈念いたしまして、私の歓迎の挨拶に代えさせていただきます。

本日は、多くの皆様方にお集まりいただきまして、誠にありがとうございました。